

本興寺だより

令和五年
六月
第二四六号

「命と申す物は一切の財の中に第一の財（宝）なり。命はともしび（燈）のごとし。食は油のごとし。油尽きればともしび消えぬ。食なければ命絶えぬ。」

（宗祖 事理供養御書）

梅雨入りが近づいています。雨に洗われた木々の深緑はいつそう美しく感じます。自然の生命力の躍動を感じる一方で、あちこちで大きな地震が頻発して甚大な被害も出ています。自然界の優しさと怖さの両面、人の非力さを見せられていく気がします。

科学が発達してくると、人間は自然界さえも服従させ、意のままに操っていけるという傲慢な思い込みが頭をもたげてきます。

自分の学んだ知識、体験が絶対であり、誰にも頼らず己の力だけでここまでできた、と自負する人もいます。しかし生きるということは、大自然の環境、草木、植物、動物などから命をつなぎ、また関わる多くの人々のお蔭によって生かされていることを見失いがちになり易いと云われます。

日蓮聖人は冒頭の文のように、己の命の尊さを見つめ直すことの大切さを云われています。

命が一番の宝であることは誰も疑いません。しかしその命をいとも簡単に無意識に粗末にしがちだと云

ち、身体が維持されると云われます。

身体は身と心が一体です。私達の日々の生活も自分に都合の良い、甘く感じる体験は心地よいですが、辛いこと、苦味に感じることは避けたいと思います。

しかし心魂の修養のためには、この五味の心の体験は等しく必要なのだと言われます。

法華経には、「一心に佛を見てまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」とあります。命を頂いた仏様の教えを極め、自分流の考えに凝り固まった身命を取り払うことを惜しむなということです。

元横綱の貴乃花が、横綱昇進の時に「相撲道に不惜身命を貫く所存です」と述べたのは、身体や命を惜しまずに相撲道に精進する真剣な想いを、この法華経の一節を通して伝えた言葉です。

戦国武将として有名な「真田幸村」の座右の銘は「不惜身命」であり、家紋は「六文銭」でした。

六文銭は三途の川の渡し賃。戦場でも日常でも、自らの身命を惜しまない決死の覚悟で生きる意気込みを家紋の旗印に使ったのです。

人間の肉体の細胞は日々新陳代謝をして入れ替わります。そこには生と死が絶えず繰り返されています。皮膚の細胞は約一か月で全て入れ替わり、血液は四か月で全て入れ替わり、肝臓や腎臓は一か月でほとんど、一年で全て入れ替わりと云われます。脳の神経細胞さえも死滅するばかりではなく一方で増え続けていると云われます。

今存在する私達の肉体は、過去数年前の身体は新陳

われます。過労、心労、食べ物等により命を縮めるのです。お経の中では命は「身命」と表わされています。「身命」とは、身体と生命のことです。命は身体を通して発動されます。その命は燈火を灯す油のように、食べることがないと保てません。

江戸中期の観相学の大家である水野南北という人は、神道、仏教、儒教、易を学び、断食、荒行を行った上で、たくさん人の生き様、死に様を観察して「人の命運は食にあり」と世に知らしめています。

如何なる吉運、健康な人であっても、常に美食と二分な食事をしたならば悪相となり、短命凶運となる。



如何なる凶運、病弱の人でも、口にする物を節して食事を腹八分にすると人は、健康で長命となり良運となるという事です。それほど食が大切なのです。

現代は、利便性が高まり、なんでも手に入る生活の中で、気ぜわしくゆとりが無くなってきています。インスタント、レトルトの代用が増え、バランスや味わいを考慮した食事が減っていると云われます。長寿社会の陰で、徐々に損なわれていく健康と、増えていく薬があります。

大切な命の元である食の重要さを私達は無いがしるにすぎないと云われます。

食物には五つの味があります。①甘味 ②酸味 ③辛味 ④苦味 ⑤鹹味（塩味）。これらの味が五臓（心臓・肝臓・肺臓・脾臓・腎臓）に働きかけて調和を保

代謝してほとんどないのです。細胞的には別人です。今生きているということは、生と死を繰り返しながら続く肉体の命の底に変わらず通して生き続ける命（魂）があるのです。

仏様は最初は「諸行無常」と云われました。命は何時か皆、形が亡くなってしまおうと。この世は苦であり、自我は本来ないのだと。しかし大乘仏教になると見方が一変するのです。

本当は①常⇨涅槃の世界（あの世）は永遠不変な佛の境地がある。②楽⇨苦を離れた世界。③我⇨自在で妨げのない世界。④浄⇨煩惱の穢れのない清浄な境地。



この常楽我浄の世界があつたの世には存在すると云われます。ではなぜ最初から仏様は真実を説かれなかったのか？

それは人は目先の願望や希望にとらわれ過ぎて人生を客観的に冷静に観られないからだと言われます。

一度その執着を断ち切るために小乗仏教から説かれたと云われます。過去から頂き、未来に続く命であるからこそ、今世の生きる重みと生き方が大事だということなのです。

私達は、食の重みを考え、食べ物に十分留意し、身体を労わり、何事も不惜身命の真剣さを持って、人生を渡る生き方が、自分の第一の宝である身命を長く輝かせて生きていけるのだと教えています。

合掌
本興寺住職 中谷聰秀